

単元を貫く言語活動を位置づけた「読むこと」「書くこと」の関連指導

新潟市立大野小学校 後藤 和広

1 研究の趣旨

説明的文章の読解では、内容理解と併せ、論理的な述べ方に着目させる必要がある。そのような学習経験を積むことで、子どもは構成や表現の工夫を学ぶことのよさを感じながら様々な文章を読むようになる。

筆者は、読み手に分かりやすく伝えられるよう、また、自分の主張を理解してもらえよう、様々な工夫をしている。本研究では、「筆者の書き方の工夫を探り、自分の作文表現に生かそう」という単元を貫く言語活動を設定する。そして、「読むこと」「書くこと」相互の活用を図ることにより、論理的、効果的な述べ方について、理解を深めさせていく。

2 目指す子どもの姿

既習経験を基にして筆者の書き方の工夫を読み取り、それらを自分の表現に生かすことができる子ども

3 実践の概要

(1) 単元名 筆者の書き方のひみつをさぐろう！ (パート I II)

(2) 教材名および主な学習の流れ

教材名	【単元を貫く言語活動】と学習の流れ
実践Ⅰ ガラパゴスの自然と生物 ↓ 動物の体と気候	【説明的文章の基本の型を知り、その型に沿って生活文を書く】 ① 短文の例を基に、説明的文章の基本の型を理解する。 ② 筆者が多くの情報から事例を選び、提示する順番を工夫していることをつかむ。結論の内容を基に、主張の内容を推論する。 ↓ ③ 事例の提示順の工夫を話し合う。結論を基に主張の内容を考える。 ④ 基本の型を使った生活文を書く。
実践Ⅱ 森林のおくりもの	【筆者の工夫を生かし、「森林についてのミニ説明文」を書く】 ※ 森林に関する本を学級に置き、朝学習時などに並行読書を行う。 ① 文章を話題提示、具体的事例、結論・主張に分ける。 ② 筆者の主張をとらえる。読み手を引きつける表現の工夫を考える。 ③ 事例の提示順の工夫を話し合う。 ④ 筆者の主張と関連したミニ説明文のテーマを選ぶ。並行読書をした本から事例の材料を集め、整理する。 ⑤ グループ学習をしながらミニ説明文を書き、相互評価を行う。

4 指導の具体 ～目指す子どもの姿を具現するための手だて～

実践Ⅰ 「ガラパゴスの自然と生物」「動物の体と気候」

短文を使って、説明的文章の基本の型を理解させる。(学習の流れ ①)

単元の最初に、次のようなカードを数パターン提示し、各カードの文の働きと重要度を話し合わせた。

皆さんも、周りの人たちに優しくしましょう。 (主張)	このように、とても優しいので、みんなに好かれています。 (結論)	※ 結論にある「優しい」に つながる。 (具体的事例) 捨てられていたネコを家に連れて帰り、世話をしています。	私たちのクラスには、(※自分の名前)さんという人がいます。()さんは、みんなに好かれています。なぜでしょうか。 (話題提示、問題提起)
-------------------------------	-------------------------------------	--	---

子どもたちが考えを出し合った後、文章構成の基本型として、次のように整理をした。

話題提示・問題提起	話題について知らない人に興味・関心をもたせる。
具体的事例	読み手を「なるほど!」と思わせる例を出す。
結論	事例に共通して言えること(「優しさ」)をまとめる。
主張	結論の内容が「みんなにとって大切だよ」と訴える。

- 主張がない文章は「報告、レポート」であり、主張があると「論説」になる。
- 文章の中で重要度は、「主張」→「話題提示」と「結論」→「具体的事例」である。「話題提示」と「結論」が、問いと答えの関係になる。
- 筆者は最も伝えたい「主張」(報告文では「結論」)を納得してもらえよう、文章中に様々な工夫、しかけをしている。

段落の役割とつながりをつかませるため、教材文を加工して提示する。
(学習の流れ ②~④)

(ガラパゴスの自然と生物)

この教材は、教科書以外からの持ち込みである。教材を読む前に、子どもたちにインターネットでガラパゴス諸島の生物を調べさせ、「たくさんの生物から、この島々のすごさを伝えるなら何を選べばよいか」と投げ掛けた。

教材文は「事例」の順番を入れ替え、「結論」「主張」の一部を削除して提示した。子どもは三つの生物(ゾウガメ、ペンギン、キク)の提示順を推測し、その理由をペアやグループで話し合っていた。その後、正しい順番を知らせ、事例の内容を基に、小グループで「結論」「主張」に入る内容を考えさせた。

これらの活動を通して、子どもは筆者が多くの情報から事例を選んでいることや、提示順が「大きい動物→小さい動物→大きい植物」のように「読み手にとって分かりやすい例→読み手を驚かせるような例」になっていることを指摘することができた。また、「結論」が「事例」に共通して言えることをまとめ、「結論」を受けて「主張」が書かれていることを実感することもできた。

(動物の体と気候)

文章全体を俯瞰し、段落の役割とつながりをつかめるよう、教材文をB4判1枚に縮小コピーをして配付した。教材文を意味段落に分け、それまで学習した基本の型がどのように生かされているか確かめながら学習を進めた。

子どもは、教材文の写真も手掛かりにし、「寒い地方の動物」の事例(体型→体格→毛の役目)が「ぱっと見て分かるもの → だんだん細かいこと、説明しないと気付かないことになっている」「分かりにくそうなところには、理科みtainな説明を入れている」といった工夫を見つけ、発表していた。

二つの教材文を使った学習の終わりに、基本の型を生かした生活文を書かせた。

<p>このようにランドセルを使った方が、便利で安全になるのです。</p> <p style="text-align: center;">(結論)</p>	<p>また、もし、すべって後ろ向きに転んでしまったときも、ランドセルが後頭部を守ってくれます。だから、転んだときにも大きなけがをしなくて済みます。</p> <p style="text-align: center;">(具体的事例②)</p>	<p>まず、ランドセルはかたにかけるので、手が両方あきます。手さげだと手に持たないといけないため、手が片方ふさがってしまい、雨のときなどはたいへんです。</p> <p style="text-align: center;">(具体的事例①)</p>	<p>私たちは勉強道具をランドセルに入れて登校しています。では、ランドセルで来ると、どんなよいことがあるのでしょうか。</p> <p style="text-align: center;">(話題提示、問題提起)</p>
--	---	--	--

この段階では、読み取りを書く活動につなぐ経験が浅いこともあり、個別の指導、支援を必要とする子どもが多くいた。つまずきが見られる子の文章には、「すべての段落を一文だけで書いている」「事例と結論が整合していない」等の傾向が見られ、実践Ⅱへの課題を残すこととなった。

実践Ⅱ 「森林のおくりもの」

単元を貫く言語活動を設定し、「筆者の工夫を探り、それを自分の文章に生かす」という目的意識をもたせ、教材文を読み取っていく視点を与える。

先述した実践から二か月後に行ったものである。目的意識を高め、より主体的な読みを促すため、子どもに次のように話した。

- ・ 前回の学習を思い出しながら、筆者（富山さん）の書き方の工夫を探ろう。
- ・ 富山さんの書き方のよさを自分たちの作文（森林についてのミニ説明文）に生かそう。
- ・ 完成したミニ説明文は台紙に貼り、図書館の「森林の本コーナー」に置いて、全校の子どもたちに読んでもらおう。
- ・ 担任も、全員分の作文をデジタルデータにして保管したい。みんなの作文を今後、同じような学習をする際の資料として使いたい。

この働き掛けにより、「みんなを納得させる文章を書くために、筆者の工夫を探そう」という読みの目的が明確になった。単元全体の大きい学習課題が設定されたことで、「この意味段落では、どのような工夫がされているか」「筆者が書き方をこの順にしたのはなぜか」「意味段落同士は、どうつながっているか」など、各時間の課題設定もしやすくなった。

教材文は全体の構成をつかめるよう、B4判2枚に縮小をし、見開きでノートに貼らせた。また、補助黒板にも教材文を貼り、授業で見付けた構成と表現の工夫を書き加えていった。（上の写真）



子どもは前回の学習経験を思い出しながら文章を繰り返し読み、筆者の書き方の工夫に迫っていった。子どもたちが話合いで気付いた工夫は下表の通りである。

（※印は教師が補足したもの）

文章構成の工夫 （意味段落相互のつながり）	それぞれの意味段にある書き方の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題提示→大きな事例二つ→結論→主張の順になっている。 ・ 主張は最後に書いてある。 ・ 大きな事例は、「わりと身近な例→そうだったのか！と思わせる例」の順になっている。（※見えやすい事例 →見えにくい事例） （※二つの大きな事例の間に「つなぎの段落」がある） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題提示で日本と外国を比べている。（※対比） ・ 最初の方で、いろいろな木の特徴と使われ方をすごく詳しく書いている。 ・ 他の人が言ったことを書いている。（※引用） ・ 読み手に興味をもたせるため、「～でしょうか」という質問（※問題提起）、「～してみてください」（※問いかけ、呼びかけ）が何回もある。 ・ 質問をした後で、答えを書いている。 ・ 主張で「～なりません」「～ならないのです」と言い方を変えている。（※強調）

ミニ説明文の内容を、筆者の主張に関連するテーマから選ばせる。並行読書をした本から書く材料を集め、整理させることで、かかわり合い、学び合いを促す。

子どもは、上記の学習と並行し、朝学習時などに森林についての本を読んできた。そのことで、教材文の内容への関心を高め、同時に、筆者が教科書にないような多くの情報から「事例」を選び、提示順も工夫していることを実感することができた。

単元終盤では、ミニ説明文のテーマを「A 森林の働き」「B 森林と人間の健康」「C 森林を守る仕事の大変さ、大切さ」「D 森林が減ってきた原因 森林が減ると困ること」から選ばせた。そして、並行読書をしていた森林の本を全員で読み直し、A～Dの内容に関連するページに色別の付箋を貼らせ、選んだテーマについての情報を本から取り出しやすくした。



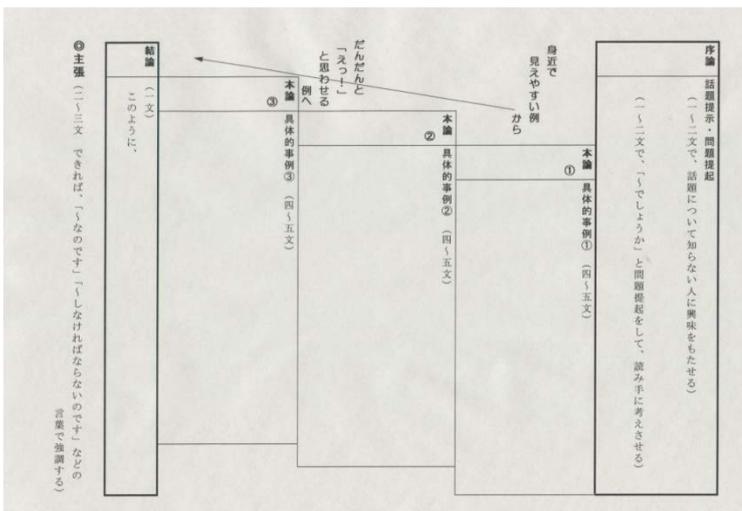
その後、「事例」に使えるような材料を別の付箋に書き出し、それらを取捨選択させ、「身近な例は最初に」「難しいもの、驚かせるものは後ろに」などの観点で提示順を考えさせた。

←子どものワークシート

「事例」の候補を付箋紙に並べ、取捨選択させた。あわせて、効果的な提示順も考え、並べ替えをさせた。

文章を書く段階では、子どもの実態を踏まえ、次の観点を示した。

- 話題提示（1～2文）→ 問題提起（1文）→ 具体的事例（4～5文）三つ → 結論（1文）→ 主張（2～3文）とする。
- 可能であれば、「数値を使う」「強調の書き方を使う」など、教材文で見付けた工夫を取り入れる。
- 困ったときは、同じテーマの友達と相談し、アドバイスしてもらう。



← 文章を書く際に使ったワークシート（形式は付箋を貼ったものと同様）

本実践では、実践 I よりも目的意識が明確であり、また、既習内容も壁面に掲示してあるため、同じテーマの子どもの話合いや相互評価が活発に行われた。

単元終末に書いた「ミニ説明文」の例

<p>森林はいろいろな働きをしています。人や動物などの生活を守っています。では、森林はどんな働きをしているのでしょうか。私たちの生活のために、どんな役わりをしているのでしょうか。</p> <p>(話題提示 問題提起)</p>	<p>一つ目は、きれいな水をつくる働きです。森がある地いきにふった雨が土にしみこみ、再び出てくる時には、おいしく飲めるくらいになっています。これは、土が水をきれいにしてくれているからです。土は火山灰のつぶやねん土などがふりつもってできたからです。</p> <p>(具体的事例①)</p> <p>二つ目は、気温が上がるのを防ぐ役わりです。森や植物がない所では昼の温度はすごく高いのに、夜はすごく低くなります。でも、公園や神社など木や植物が多い所は、気温があまり上がりません。それは木の枝や葉に落ちた雨や、土の中から吸い上げられた水の一部が水じょう気になってじょう発しているからです。</p> <p>(具体的事例②)</p> <p>三つ目は、酸素をつくる働きです。森林は、空中の二酸化炭素を吸って、酸素を出しています。それを光合成といいます。人間や動物は植物が吐き出した酸素を吸って生活しています。緑の植物がないと、人間も他の動物も生きることができないのです。</p> <p>(具体的事例③)</p>	<p>このように、森林は人間や動物が生きていくためにすみやすい環境をつつてくれているのです。</p> <p>(結論)</p> <p>森林は、私たちの生活になくてはならないものです。私たちはこれからも森林を守り、自分たちがくらしにいける環境を守っていかないとけないのです。</p> <p>(主張)</p>
--	--	---

5 おわりに（成果と課題 ～実践Ⅱを中心に～）

年間を通した段階的な指導を構想し、単元を貫く言語活動を設定したことにより、子どもは、「前に学習したことを使って考えよう、書いてみよう」という意識をもちながら学習に参加するようになった。また、「読むこと」「書くこと」相互の活用を図ったことで、少しずつではあるが、筆者の意図を推論する力を高め、論理的なものの見方を育てることができてきている。

今後は、単元全体の展開をよりシンプルにし、「読む→書く」段階における効果的な支援について検討するなど、指導の改善を図ることで、より多くの子どもが学習への見通しをもち、また、単元終了時での達成感を味わえるようにしていきたい。